

立体から平面への二段階の表現と相互鑑賞 2

ー テラコッタ作品による表現と写真撮影による表現を通して ー

大塚 習平^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

本稿では、保育学科学生達によるテラコッタ作品の「相互鑑賞」と「ふりかえりアンケート」実施により、学生達の粘土および作品に対する意識や、学生達を感じた粘土の有効性について分析した。その結果、ほとんどの学生が粘土に愛着を持ち、97%の学生が「保育現場でも取り組みたい」と回答した。

【キーワード】

造形教育 幼児教育 テラコッタ 相互鑑賞

本学保育学科では、授業「造形」において毎年「テラコッタ制作」に取り組んでいる。それは近い将来、保育現場に立つ学生達に先ずは自らが材質を肌で感じ、材質の変化に驚いたり、抵抗感を味わったり、自他の作品を認め合ったり評価し合ったりすることを、経験させたいと考えているからである。

テラコッタ制作は「粘土練り」「アイデアスケッチ」「成形」「素焼き」「施釉」「本焼き」の6行程が必要であるが、この長い行程を経た後「作って終わり」となってしまわないように、作品コンセプトについて明確に自覚できるような場の設定を試みた。それは、写真作品の提出による「作品写真一覧」作成と「QRコード」を使用した「相互鑑賞」の実践による。

本稿では前回実施した「相互鑑賞コメント」に「ふりかえりアンケート」を加え、学生達がテラ

コッタ制作を通して、どのような意識変化があったか、粘土の有効性や意義について自覚できたかについても分析した。その結果、ほとんどの学生が保育現場でも有効となる体験を積む事ができたとしている。

1. はじめに

前回実施した「二段階の表現と相互鑑賞」では、立体作品を写真撮影し、平面作品に変換する事によって、これまでとは異なる作品展示および鑑賞のスタイルを提案する事が出来た。

この鑑賞スタイルの利点は、学生がクラスの枠を超えて作品を鑑賞できること、制作者が誰かということに影響されずに、純粹に作品そのものに向き合える場を作れることである。また、携帯電話を活用することで、自分の作品を人から観られることや、人の作品を観ることに対する「気負い」や「抵抗」のようなものが見られなくなった。さらに、机の上で紙に記入して提出するよりも、作

<連絡先>

大塚 習平 otsuka@shohoku.ac.jp

品一覧の前に立ち、作品を見ながら携帯電話に入力できるので、より具体的で瑞々しいコメントを得られやすい。こうしたコメントから、学生が作品を観る時どのような部分に注目しているかについても明らかとなった。

今回、「振り返りアンケート」を加えた事によって、テラコッタ粘土や釉薬、ガラス等の素材や、手びねりや板づくり、ひもづくり、二つ割り等の技法、前述した6つの作業工程、完成作品、相互鑑賞に対する意識を把握することができた。

2. 粘土による作品制作について

対象授業、制作工程、注意事項、制作技法に関しては前回の調査¹⁾と同様とした。ただし、使用した粘土については、より自由度と完成度を高めるためにテラコッタ粘土と信楽粘土を混ぜ合わせたものを用意した。授業において学生が練ったテラコッタ粘土に、教員が取り寄せた信楽粘土を1対1の割合で練り合せた。テラコッタ粘土は大きく厚みのある作品に向いているが、シャモットなどの粒子が大きく、小さな作品や細かい制作には不向きな場合もある。以前、学生から「ザラザラして指が痛くなった」「細くした部分が折れてしまった」等のコメントが寄せられている。これに対し、信楽粘土は粒子が細かく、厚みのある作品には向かないが、繊細な造形には適している。粘土の混合により、両者の利点を併せ持つ事が可能となる。

3. 作品相互鑑賞と学生からのコメント

学生から送られて来た写真を一覧表示し、教室にて相互鑑賞を行い、QRコードによるコメント集計(図1-①、②)を行った。



図1-① QRコード



図1-② 作品鑑賞 コメントを送信する様子

その結果、10票以上集まった作品9点について、学生のコメントも合わせて紹介したい。



図2 No.155

No.155 (図2) を選んだ学生は30名で、理由についてのコメント¹⁾は以下の通り。

- ①「ただベンチに座らせるだけでなく風船をもたせたりする工夫が良いと思いました」(10)
- ②「ベンチに座っている姿が愛おしいから」(3)
- ③「手で作ったとは思えない程上手だから」
- ④「作品と背景がマッチしていて、構図がうまく作品がいかされていた」(5)
- ⑤「頭から芽が生えているところが良い」(2)
- ⑥「テラコッタ作品の良さが表現されている」
- ⑦「少し離れたところから撮影しているところが良いと思いました」(4)
- ⑧「作品を大きく撮るのではなく、あえて小さく写しているのが良い」
- ⑨「ハニワの表情が独特で可愛い」(2)
- ⑩「写真のアングルが良く、大きなベンチとの対比で小さな作品を良く表現している」(2)
- ⑪「(作品の) 表面がデコボコでなく綺麗だった」
- ⑫「今にも動き出しそうほのほのしている」(2)



図3 No.171

No.171 (図3) を選んだ学生は23名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「背景の効果で箱からキラキラプレゼントが飛び出してくる感じが良く出ている」(10)
- ②「リボンの形や色使いがとても上手」(8)

- ③「プレゼントボックスの立体感が出ている」
- ④「作品の立体と背景の平面の対比が良い」
- ⑤「中にアクセサリーを入れる事ができそう」
- ⑥「写真の撮り方や角度が良い」
- ⑦「作品が膨らんだ感じでプレゼントがたくさん入っていそう」



図4 No.122

No.122 (図4) を選んだ学生は21名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「女の子らしい雰囲気が出ていた」
- ②「白い背景でピンクが映えている」
- ③「縁のピンクが底の色と合っている」(3)
- ④「小物入れとしてのサイズがちょうど良い」
- ⑤「ハートの形が滑らかで厚さも均一、丁寧で綺麗」(10)
- ⑥「厚さがあって丈夫そう」
- ⑦「インテリアの一部に馴染んでいる」
- ⑧「小物のセンスも良く、作品と合っていた」
- ⑨「アクセサリーを入れて実用性がある」(5)
- ⑩「作品の底が透明感を出していて綺麗」
- ⑪「小物もピンク系で統一感がある」
- ⑫「ゴージャスな雰囲気があり、お洒落」

- ⑬「デザインがシンプルだけどとても綺麗で色合いが素敵でした」
- ⑭「色のバランスと形がすごく可愛かったです」
- ⑮「形が変わってて器用だと思ったから」



図5 No.110

No.110 (図5) を選んだ学生は19名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「シーサーが細かく作られている」
- ②「写真の撮り方が上手い」
- ③「背景の石の色ととても合っている」(2)
- ④「様々な色の小石が沖縄のようで、作品を引き立てている」(5)
- ⑤「シーサーの迫力を良く表現できている」
- ⑥「沖縄に行きたくくなるような写真」
- ⑦「全体の色合いが綺麗で感動しました」
- ⑧「夏の暑さのようなものを感じた」
- ⑨「シーサーの歯やたてがみなど細かいパーツを丁寧につくっているところ」(5)
- ⑩「きっちりし過ぎていないところが可愛い」
- ⑪「シーサーが怖過ぎず、可愛らしい」
- ⑫「魔除けにもなりそう」
- ⑬「シーサーをテラコッタで作るという発想が凄いいと思いました」



図6 No.188

No.188 (図6) を選んだ学生は19名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「背景の雲が本物みたいで実際に飛んでいるように見える」(10)
- ②「作品を目立たせるように工夫されている」
- ③「情景を思い浮かべやすい」
- ④「機体上のカーブと下のジェットの部分良かったです」
- ⑤「作品の表面がつるつるしていて本当の飛行機のような質感を出している」
- ⑥「着色が土の素朴な感じを損なわないようにされているのが良い」
- ⑦「どのように撮影したのか聞いてみたい」
- ⑧「少しこちら側を向いていて向かって来そうな感じが面白い」
- ⑨「飛行機の形が風船を膨らましたようで面白く、浮いている感じがして良い」
- ⑩「最初から具体的なイメージを持って作った感じがしました」



図8 No.192

No.192 (図8) を選んだ学生は19名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「メモが挟めるようになっていて実用的」(8)
- ②「かたつむりの渦巻きが綺麗に出ていて色も区別されている」
- ③「カタツムリという形が親しみやすい」
- ④「家族とのコミュニケーションがとれるという点が良い」
- ⑤「テラコッタという素材を使って、クリップスタンドを作ろうというアイデアがすごい」
- ⑥「ただの置物でなくて(後から)驚いた」
- ⑦「斜め上から撮影した構図が良い」
- ⑧「玄関にひとつあると良いと思います」
- ⑨「メモが挟んであって日常の一部になっていてほっこりしました」
- ⑩「殻の青色がまばらで味がある」(2)



図9 No.124

No.124 (図9) を選んだ学生は15名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「和の感じに合っていて、枝豆ともマッチしてとても良かった」(4)
- ②「居酒屋でありそうだった」
- ③「デコボコしている感じも素敵」
- ④「器の配置や質感、透明さから涼しさを感じられたから」(2)
- ⑤「夏らしく実用的なのが良いと思った」(3)
- ⑥「枝豆と簾が涼しげで作品の味を引き出していました」(2)
- ⑦「枝豆が食べたくなるような器だと思った」
- ⑧「テラコッタでの手作り感があまりなく、すごく馴染んでいた」
- ⑨「枝豆の緑と器の青が綺麗に重なっていた」
- ⑩「2つの器の質感が統一感があって良かった」
- ⑪「写真の取り方が上手。上から撮っていて器の中も分かりやすくシンプルでした」
- ⑫「どれが作品なのか分からない程、精巧に作られていたと思います」



図10 No.178

No.178 (図10) を選んだ学生は15名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「明かりがおしゃれで作品と風景が合っていると思いました」(4)
- ②「作品の中にキャンドルを入れて光を出し、不思議な形を浮き出したところが印象的でオリジナリティを感じました」(4)
- ③「ランプとして使えるところ」(2)
- ④「夜空とマッチしているところ」
- ⑤「光の温かさが伝わってくる」
- ⑥「写真の撮り方が綺麗です。あえて左に寄せているところが素敵です」(3)
- ⑦「作品自体の構成を丸と紐だけで作り上げているところ」
- ⑧「作品の形が規則的ながらも複雑で、良く出来ていると感じました」(2)
- ⑨「光沢により作品自体が輝いているところ」
- ⑩「陶器をもっと明るく撮れたら良かったと思いました」
- ⑪「自分が作った作品に自分の好きなキャンドルを入れたらもっと愛着が湧くと思いました」
- ⑫「どのように使うかをちゃんと計算して作っていたのだと思いました」



図11 No.230

No.230 (図11) を選んだ学生は15名で、理由についてのコメントは以下の通り。

- ①「作品の大きさがちょうど良く、プーさんが持っているかのように可愛い仕上がり」(8)
- ②「外側に少し黄色を塗っていて蜂蜜のツヤの感じが良くでていた」(3)
- ③「作品の表面がデコボコしておらず、全体的に丸みが出ていて良かった」(2)
- ④「写真の撮り方が画面一杯に使っているのも、他の作品よりインパクトがあった」
- ⑤「プーさんの顔の近くに瓶を持ってくる事で、より良く見え目立っている」(4)
- ⑥「プーさんが今にも蜜を食べそうに見えます」
- ⑦「プーさんの蜂蜜壺そっくりで、中に蜜をいれたくなります」
- ⑧「キャラクターとのバランスが良く、蜜壺が主張しすぎず、作品の良さもわかる」

今回、15票以上の9作品に寄せられたコメントで共通していたものは以下の通り。

- 「作品が背景によって引き立てられていた」
- 「世界観が良く表現されている」
- 「情景を想像しやすい」
- 「写真のアングルが良い」
- 「作品の配置や大きさのバランスが良い」
- 「作品の表面が丁寧に作られていて滑らか」
- 「デザインがシンプルだけど丁寧に綺麗」
- 「実用性がある良い」

前年度の代表7作品に共通したコメントとして多かったのは以下の通り。

- 「飾っておきたい」
- 「世界観が良く表現されている」
- 「作品と背景とのコラボレーションが良い」
- 「写真の撮り方がうまい」
- 「写真のアングルが良い」
- 「背景が作品を引き立てている」
- 「本当に生えているようすごい」
- 「色合いがリアルでおいしそう」
- 「色使いがきれい」
- 「色合いがとてもきれい」

上記の「共通コメント」を見比べてみた時、際立った違いは感じられなかった。しかし、焼きものの自体に対するコメントよりも、写真撮影の工夫や写真表現へのコメントが多くなってきていることが分かった。また、写真作品自体も昨年より完成度の高いものになって来ていると感じた。この理由としては、年々向上しているカメラの性能が反映していること、生活の中で写真撮影をしたり、写真を見せ合ったりする中で、知らず知らずのうちに技術が磨かれていること、本学造形室の廊下に展示されている先輩の写真作品を見ていることにより、粘土制作の段階から、あらかじめ写真作品としての完成を予想する事ができた等が考えられる。

4. アンケート調査について

相互鑑賞終了後、授業の中で「テラコッタ制作ふりかえりアンケート」を実施した。

制作過程の中で「最も印象的だった」ところはどこか質問したところ、以下のような結果となった。

- ①「土練り」38% (50名)
- ②「成形」26% (35名)
- ③「施釉」13% (17名)
- 「(本焼き後) 窯出し」13% (18名)
- ④「作品撮影」6% (7名)
- ⑤「相互鑑賞」4% (5名)
- ⑥「(素焼き後) 窯出し」1% (1名)

「(本焼き) 窯入れ」1% (1名)

上記の通り、一番「印象的」だったのは「土練り」だったが、その理由として以下のようなコメントが見られた。

・粉の状態から練り上げていく事に関して

「粉から作れるのを初めて経験した」

「粉から作れて不思議だった」

「粉から作るのが難しかった」

「(練っていくうちに) 感触が変わっていくのが面白かった」

「(粘土を) 自分で作っている感じがあった」

「職人さんがやっている作業みたいで新鮮だった」

「市販の粘土にはない課程を経験できた」

・粘土の練り方について

「水の具合を失敗した」

「程よく柔らかく練れた」

「菊練りが難しかった」

「練る感覚が懐かしかった」

・粘土の感触について

「思ったよりも固くて大変だった」

「土の冷たさが楽しかった」

・粘土を練ることで

「これからどう形にしようかワクワクした」
次に多かったのは「成形」であった。理由について
は以下の通り。

・粘土の可塑性について

「イメージを形にしていく楽しさ」
「思い通りにできる楽しさ」
「ゼロから作り上げる事の楽しさ」

・粘土の抵抗感について

「手本を見た時簡単そうだったのに難しかったから」
「苦労したから」

・技法について

「いろいろな技法を試せると思ったから」
「形に合った技法が多くて驚いた」
「粘土を糸で切るのが初めてだった」
「板づくりが初めてだった」

・取り組む姿勢について

「授業外でも丁寧に取り組んだから」

・デザインについて

「一番悩んだから」

三番目に多かったのは「施釉」で、主な理由については以下の通り。

「初めてだったから」
「色を付けると印象が変わる事を知った」
「(完成を) イメージをしながら着色した」
「(完成が) どうなるかワクワクした」
「久しぶりに塗ったので」
「色がなかなか付かなかったので」
「違う色になるので(予想が) 難しかった」
同じく三番目に多かったのは「(本焼き) 窯出し」

であった。主な理由については以下の通り。

・ガラスを底面に敷き詰めた学生

「どうなるかワクワクした」
「きれいに広がっていた」

・釉薬の発色について

「色ムラがあったが良い感じになった」

「色が変化して驚いた」

「薄い色が濃くなって感動した」

「少し小さくなったり、イメージが変化したりして面白かった」

「自分の頑張りが感じられた」

「長い時間をかけたものがどうなるか楽しみ」

「綺麗に仕上がり、感動した」

四番目に多かったのは「撮影」であった。主な理由は以下の通り。

・撮り方について

「工夫したら全く違う印象になった」
「いかに綺麗に見せるか考える事が面白い」
「背景を選ぶのが楽しかった」
「夜10時に朝ご飯を作って撮影した」

・自己アピールすることについて

「自分で作ったものを自分で撮影できた」

五番目に多かったのが「相互鑑賞」であった。理由については以下の通り。

「携帯を使って(課題を提出するのが) 大学生っぽいと思った」

「自分では思いつかないアイデアが沢山ある」

「色々な作品を背景とともに見る事ができた」

次に「授業を受ける前と受けた後で、粘土に対する気持ちにどのような変化がありましたか」という質問については、「肯定的な気持ち(好き)になった」学生が57%(96名)、「変わらない(もともと好き)」学生が37%(49名)、「否定的な気持ち(嫌だ、難しい)」の学生が6%(8名)という結果となった。

また「制作体験を通して、将来自分が関わる子ども達とも一緒にやってみたいと思いましたか」という質問に対しては、3%(4名)の学生を除き、97%の学生が「保育現場でも取り組みたい」と回答した。

さらに「将来、粘土を扱う場合子ども達にどのような体験をしてもらいたいと考えますか」

という質問に対しては「手触り（触感）」44%（58名）「自由な発想や表現」35%（46名）「粘土が変化していくことへの驚き」10%（13名）等が見られた。

そして粘土体験の際「子ども達への言葉がけで気を配りたい」事は何か質問したところ「安全上の注意をする（口に入れない）（投げない）（目に入らないようにする）」が30%（51名）、「自由に作れるようにする（評価・否定しない）」30%（40名）、「良いところを伸ばす（褒める）」10%（12名）、「やさしく見守る（あえて言葉がけをしない）」6%（8名）、「いろいろな話を話かける」5%（6名）等が見られた。

5. 考察

今回「振り返りアンケート調査」を実施した事により、以下の内容について明らかとなった。

「最も印象的だった過程は」という質問に対し、新たな試みである「作品撮影」は4番目（7名）、そして「作品相互鑑賞」については、5番目（5名）という結果となった。この事から、「作品の平面化」及び「相互鑑賞」は、こちらが期待したほど印象に残っていない事が分かった。その理由については、カメラの発達により撮影そのものについては、それ程苦勞せずオートマチックにできてしまう事、加えて撮影自体も日常的に行われているためという事が考えられる。

また「振り返りアンケート」の質問項目についても「一番、印象に残った過程はどこか」という聞き方をしてしまった為、回答が1点に集中してしまい、それ以外の「過程」が浮上できない状況になったと考えられる。よって次回は「印象に残った制作過程について選択して下さい（複数回答可）」と改めたい。

これと比較して、直接素材に触れ、素材と格闘し、感覚を通して体験した「土練り」（50名）、「成

形」（35名）、「施釉」（本焼き後）窯出し」（17名）は、印象に残っている事が確認できた。

「土練り」では「ビチャビチャで水の加減が難しかった」「（粘土が）指についてとれなかった」「いつまで（練っても）塊にならなかった」など、粘土の抵抗感を味わった学生もいたようだ。また「粉を自分で練って自分の粘土にできた」「粉から作れるのにビックリした」「市販の粘土にはない過程を経験できた」「職人さんがやっている作業みたいで新鮮だった」と粘土そのものを作り出す手作り体験について喜びを感じる事ができた学生もいたようだ。さらに「程よく柔らかく練り上げられた」「感触が変わっていく過程が面白かった」「土の冷たさが気持ち良かった」「どういう形にするかワクワクした」など最初から肯定的な気持ちで取り組んでいる学生が多くいる事も確認できた。

「成形」では「イメージする楽しさ」「思い通りの形にしていく楽しさ」「0から作り上げていく楽しさ」「一番悩んだところ」といった粘土の醍醐味を主体的に楽しもうとするコメントが見られた。また「教わった技法を試してみたかった」「粘土を糸で切ったりしたのが初めてだった」「板づくりが初めてだった」「形に合わせた技法が多く驚いた」といった知識的な内容と技術的な内容について知る喜びを味わった学生もいたようだ。また「手本を見た時は簡単そうだったのに難しかったから」「すごく時間がかかったから」というように技術的な抵抗感を味わった学生も散見された。

「施釉」に関しては否定的な感想が少なく、「どんな色になるかワクワク」しながら、ある程度先を見越して、色を選択する姿勢が見られた。

「窯出し」では「色むらがあったが良い感じになった」というように変化を楽しむ気持ちや、新たな見方、感動を得る事ができたようだ。さらに「自分のがんばりが感じられた」と自己肯定感を持つ事ができた学生もいたようだ。

「撮影」では「写真で工夫して全く違う印象になった」「夜10時に朝ご飯を作って撮影した」というように作品と背景をどう切り取るかによって新たな作品として表現できる面白さに気づく事が出来た学生もいたようだ。

「相互鑑賞」に関しては「自分では思いつかないようなアイデアが沢山あって印象的」というコメントに見られるように、お互いに発見し学習できる機会を作り出す事ができたと思う。

完成した立体作品を撮影し、平面化するという「二段階の表現方法」は、学習者にコンセプトをより明確に意識する必要を迫る。従って、「コンセプトに沿って作品を形成する」というより、「作る事だけで精一杯だった」という学生であっても、撮影の段になって改めてコンセプトに立ち戻る機会を得られたと考えられる。

それから、本課題に取り組む前、以下のような苦手意識や偏見を持っていた事が判明した。

「臭いや汚れるのが嫌」

「(材料や道具などの) 準備が大変」

「爪に(粘土が) 入る」

「(粘土は) 小さな子どもが遊ぶもの(大人がやるものではない)」

「(自分が粘土で) 作れるか不安」

「本当に粉から粘土ができるのか(疑問)」

しかし、こうした不安や不満を持っていた学生も、本課題に取り組んだ後は以下のような肯定的な意識へと変わる事ができた。

「粘土に触れる事は気持ち良い」

「ずっと(粘土を) 捏ねていたい」

「家にも(粘土が) 欲しい」

「(自分が練った) 粘土に愛着が湧いた」

「(次は) もっと工夫して作りたい」

「(長い過程の末できたので) 達成感があった」

「イメージ通りに作る事が出来た」

「ワクワク感を味わう事ができた」

このように、アンケート結果から大半の学生が授業を通して粘土制作について肯定的なイメージを抱くようになった事が推察される。しかし、前述したように8名の学生は粘土に対し否定的な回答だった。ただし、具体的なコメントを見てみると、課題に取り組む前は「簡単そう」「懐かしい」「たまにやりたかった」「楽しみ」としていた学生も数名いたが、制作後は

「(焼き物の世界は) 奥深い」

「(粘土を) 練るのが大変だった」

「(アイデアを) 形にするのが難しい」

「(作品) 表面を滑らかにするのが難しかった」という感想に変わっていたことから、粘土制作を通して苦手意識が強くなったという事ではなく、得意としている学生が、より完成度の高いレベルに意識を向ける事ができたと考えられる。

また、「一生残せるものをつくる事ができた」(焼き物は割れない限り、一生どころか数世紀に渡って保存することができる)、「父親が喜んだ」という満足感を得る事ができた学生や「大人でも楽しめる」「子どもたちも好きなはず」「保育現場でも使いたい」と将来の取組みに意欲を持った学生、「案外手軽に取り組める」「種類によって作り方をえられる事が分かった」と自発的に取り組んでいく姿勢が身についた学生、「視野が広がった」と、単なる粘土制作以上の何かを感じてくれた学生もいた。

以上、アンケート分析の結果、ほとんどの学生が「保育現場でも有効となる体験を積む事ができた」と感じてくれたようだ。

6. さいごに

前回に引き続き、今回も作品の鑑賞やアンケート集計をしました。その結果「QRコード」へのアクセスが学生の鑑賞意欲を高めるのに有効だったと確信できました。「QRコード」作成ならびにア

ンケート作成、集計作業にあたっては、お忙しい中、ICT教育センターの岡原課長補佐ならびに色川雄樹主任にご助力いただきました。「ふりかえりアンケート」は非常勤講師の三上慧先生のご提案によるもので、本稿では集計結果を一部活用させていただきました。

この場をお借りして、御礼申し上げます。

註

- 1) 「立体から平面への二段階表現と相互鑑賞
ーテラコッタ作品による表現と写真撮影による表現を通してー」大塚習平 湘北紀要第37号

参考文献

- 「テラコッタの技法 土と火による生命の誕生」橋本裕臣 美術出版社 1978年2月20日
「楽しくできる手びねり テラコッタの技法」佐々木憲章 雄山閣 昭和58年10月5日
「粘土でつくる」山本常一 美術出版社 昭和43年7月15日
「彫塑 制作と技法の実際」岩野勇三 日貿出版社 1982年12月10日

Two stages of expression which is to plane work from solid work
and appreciate a mutual work 2

- Expression by terracotta work and expression by picture work -

Shuhei OTSUKA

【abstract】

I analyzed “mutual enjoyment comment” by a nurture department students’ work.

And I put “looking questionnaire” into effect. I could confirm how students’ consciousness changed by this questionnaire and students could be aware of their responsibility about the significance of clay work. As a result, it was revealed that most students had affection to clay and could have the experiences which also become effective at a nurture site.

【key words】

Education through Art, Child education, Terracotta, Mutual evaluation